

第 38 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

今年度の北海道建築賞委員会は、2013 年 5 月 9 日、札幌市内で 2013 年度の第 1 回委員会を開催した。今年度の審査方法を審議し、北海道建築賞の主旨に沿った建築へのまなざしと応募作品に対する審査方法を委員全員で確認した。その後、応募状況を検討し、委員の中で注目している作品を「2012 北海道建築作品発表会」や他の発表作品などの情報をもとに議論し、その中から委員からの応募推薦対象作品として 7 作品を選び、各設計者に正式な応募手続きを依頼した。

第 1 回の審査委員会は、5 月 31 日に開催され、応募作品が 7 点に前述の 7 作品を加えた計 14 作品を今年度の審査対象作品とした。

応募作品及び応募設計者（応募順）：

- ① 空水住まい（ヨシダオサム君、早川未紗君／Atelier Monogoto 一級建築士事務所）
- ② 赤川保育園（山田俊幸君／山田総合設計㈱）
- ③ 一正蒲鉾㈱北海道工場（下村真一君、古市理君、宮本晃代君／大成建設㈱一級建築士事務所）
- ④ 砂川市立病院（福島祐二君、北原和俊君、藤原益三君、近藤彰宏君、小川孝君／㈱大建設計医療事業部、㈱大建設計札幌事務所、㈱日建設計、㈱北海道日建設計）
- ⑤ 札幌麻生脳神経外科病院（飯田満君／㈱サン設計事務所）
- ⑥ 新十津川中学校武道場（山本正則君、小野寺和久君／㈱北海道建築総合研究所）
- ⑦ 稚内駅前地区市街地再開発 ～キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ～（小谷陽次郎君、加納美佐恵君／㈱日建設計、㈱北海道日建設計）
- ⑧ 苫小牧信用金庫まちなか交流館（山脇克彦君、小谷卓司君、大門浩之君／㈱日建設計、㈱北海道日建設計構造設計室、㈱北海道日建設計設計室）
- ⑨ ATMN（大坂美保子君、大坂崇徳君／アーキラボ・ティアンドエム）
- ⑩ SPROUT（石塚和彦君／石塚和彦アトリエ一級建築士事務所）
- ⑪ 津別町多目的活動センター「さんさん館」（井端明男君／㈱アトリエアク）
- ⑫ 北海道工業大学体育館 “HIT ARENA”（佐藤孝君、芳川朝彦君、種田俊二君／北海道工業大学、a-plus 芳川朝彦建築設計室、清水建設㈱一級建築士事務所）
- ⑬ 円山の家（佐野天彦君／アトリエサノ）
- ⑭ repository（五十嵐淳君／五十嵐淳建築設計事務所）

審査における評価の視点として、これまでの選考の視点を崩さずに、計画理論や設計・デザインに対しての新しい挑戦や問題意識、新しい生活・環境の構築を 目指した意欲と新たなビジョンの構築に対する「先進性」、自然、環境、人間社会総体を含めた時間的、空間的「規範性」、それらを実現・統合して建築として の高い質を確保することを 目指す「洗練度」の3項目を共通価値とすることを最初に確認した。その後、現地審査対象作品を選定する書類審査に移った。応募資料の内容を丁寧にトレースし、議論を重ねた末に、現地審査該当作品（順不同）として以下の8作品、⑦稚内駅前地区市街地再開発 ～キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ～、⑧苫小牧信用金庫まちなか交流館、⑨ATMN、⑩SPROUT、⑪津別町多目的活動センター「さんさん館」、⑫北海道工業大学体育館“HIT ARENA”、⑬円山の家、⑭repository が選定された。しかし、この後、現地審査が不可能であることが判明した⑬円山の家は、応募設計者の了解のもと、審査対象から外し、7作品を現地審査該当作品とした。

現地審査は、委員7名の全員の参加を原則に3回に分けて実施された。6月30日に⑨ATMN、⑩SPROUT、7月16日に⑫北海道工業大学体育館“HIT ARENA”、⑧苫小牧信用金庫まちなか交流館、8月17～18日に⑦稚内駅前地区市街地再開発 ～キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ～、⑪津別町多目的活動センター「さんさん館」、⑭repository の審査を周辺環境から建築空間の内外まで詳細な観察と、設計者やクライアントからの説明や質疑などを行った。

最終審査会は、8月21日、札幌市内で開催され、現地審査作品を対象に最終選考が行われた。選考審査は、各委員が各作品に対する見解を述べたのち、候補作品の設計者と同一の組織に所属する委員がその後の選考から外れ、候補作品全体について議論、さらには、個々の作品の評価と意義が整理され、長い討議になった。その選考過程で、7作品よりも、⑧苫小牧信用金庫まちなか交流館、⑨ATMN が選考対象から外れ、5作品に絞られた。その上で、各作品に対して評価と意義がもう一度整理された。大多数の委員から今年度は、全体的にレベルの高い作品が揃っているとの評価があり、北海道建築賞、同奨励賞の双方の選考を同時に進める中で、本賞には届かないが、建築奨励賞としての基準を十分満たしているとの評価より、⑩SPROUTを本年度の北海道建築奨励賞とした。その後、残りの4作品に対しての北海道建築賞の選考に入り、各委員より再度評価を行った。その結果、⑦稚内駅前地区市街地再開発 ?キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ?、⑪津別町多目的活動センター「さんさん館」が選考対象から外れた。そして、再度それぞれの作品の評価と意義の整理がなされ、最終的に委員 全員の合意によって⑫北海道工業大学体育館“HIT ARENA”と⑭repository を本年度の北海道建築賞とした。

「北海道工業大学体育館“HIT ARENA”」は、大学の福利厚生施設という性格を体育館という

建築空間に十分に持ち込み、学生たちが様々な目的で集まり、溜まる広場空間を建築で構成している。このことが、つつい機能優先でステレオタイプ化してしまう大学の運動施設を大学キャンパスの中でのアクティビティを受け入れる受容器として、建築に魅力的な空間を与えたという計画的先進性と、温熱環境的に不利にあるアリーナをペリメーター側に小部屋や外皮を重ねることでエネルギーロスを減じつつ、大きなエネルギーコストをかけずに、良好な室内環境を達成していることは、北海道の建築としての規範性、洗練度を併せ持ち、北海道建築賞として高く評価できる。

「repository」は、北海道の気候に対する住宅のあり方という普遍的なテーマを空間の構成と温熱環境、さらにそれらに呼応した住まい方の提案に翻訳し、高い次元でのデザインにまとめ上げた作者の力量が大いに評価された。吹きさらしの田園地帯に屹立する田園住宅に対して、その気候を防御するために、外皮と小部屋で外周を取り囲み、その中はほぼワンルームという構成で、リーズナブルな温熱環境を構築すると同時に、トップライトから降り注ぐ光は、その量から外部を感じさせるほどの明るさを持つ。作者が、ずっと追いかけて来たワンルーム形式の居住形態は、内部に絵画的な風景をもたらす、極限にまで削ぎ落とされた薄い額縁のような大きな開口を持つ壁によって、ゆるやかに仕切られている。住環境としての性能を十分確保するという規範的命題を達成した上で、奥行きやスケールを自在に操作し、実際の大きさ以上の感覚をもたらすデザイン力は、住宅としての枠を大きく超えた先進的なデザインとして高く評価でき、北海道建築賞に値する作品である。

「SPROUT」は、施主との十分な協議によって彼らが目指すライフスタイルを狭小な敷地条件やコストなどの制約といった現実的な問題を乗り越えながら、住宅空間として特徴的な重層的空間をデザインしていくという作者の建築に対する真摯で、丁寧な対応とその構成力に好感が持てる。人が暮らしていくために必要な、人とももの場所が見事に構成された佳作である。

今回の建築賞の審査課程で大きな議論になったのは、地域における公共建築のあり方である。財政的基盤が脆弱になる中で、地域が真に求める建築を多様な主体と議論を重ねながら見いだしていくという計画的な努力は大いに評価できるものがあるが、それを引き継いで建築化する過程に関わる建築家も含めた関係者の創意工夫が今一つ完成された作品に見えてこないところにある種のふがいなさを感じた。公共建築を通じて北海道の建築の質を高めていく道は、険しい道のりであるが、現実の法規制や財政、ステレオタイプの既成概念に立ち向かいながら、あきらめずに地域のための質の高い建築を目指す関係者の努力が生まれることを期待したい。

現地審査7作品のうち、4作品は残念な結果となったが、評価の要点を以下に述べ、今後の

活躍に期待したい。

稚内駅前地区市街地再開発 ～キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ～：

多様な主体が交錯する複雑な再開発のプログラムを整理し、建築として結びつけた計画力は高く評価できる。最北端の終端駅や離島を訪れる観光客だけでなく、地元市民に対するパブリックスペースの提供は、地域に根ざした建築のあり方を良く表している。しかし、このようなプログラムを空間として翻訳し、デザインとして昇華できたのかどうか。地域に必要なものが装備されたというところまでで終わっている部分があるところが残念である。

苫小牧信用金庫まちなか交流館：

地域の金融機関が、中心市街地の一等地に持つ地所を活かして、地域貢献したいという思いから生まれた観光情報提供と足湯というプログラムは、大いに評価できる。木造の可能性を表現した交流館部分だけでは、どうしてそのような構造形式をとったのかという必然性が今ひとつ見えてこなかった。本体のオフィス棟と交流館との関係性や敷地全体として建築と周辺地域とのあり方にまで及んだ思考が取れなかったことが悔やまれる。

ATMN：

アトリエ兼住居をシンプルな9mの箱に収めつつ、微妙に角度がついたもう1つのコアによって領域化を図るというプログラムには、空間設定の自由度など、可能性を感じる。オフィスとしてはあり得ると思われるが、それがアトリエ兼住居とした場合、実際には居住が行われているのか、生な生活に対する対応があるのかという点で、住宅としての意味と規範性に少し不満が残った。

津別町多目的活動センター「さんさん館」：

総合計画立案時から市民が参加してつくられた構想が実現化されていったプロセスは、地域にとっての建築として大いに意味を持つものである。木の産地であるから木をふんだんに使うという判断はまったく誤りではないが、中庭の使われ方やそれを取り巻く諸室との関係性もオーソドックスでこそあれ、何か新たな規範的提案がなされているわけではない。地域全体に建築が出来ることは何かということと、建築の質を高めるというコミュニティ・アーキテクチャーの命題を建築家としてもう1度考える必要があるのではないだろうか？

日本建築学会北海道支部 北海道建築賞委員会

主査 小篠 隆生

委員 加藤 誠、久保田 克己、齋藤 利明、鈴木 敏司、平尾 稔幸、山田 深

(文責：小篠 隆生)

第38回 北海道建築賞

佐藤 孝 君 「北海道工業大学体育館"HIT ARENA"」の設計

工科系私立大学である北海道工業大学につくられた、スポーツ系の機能を中心に構成された複合施設である。計画にあたっての2つの大きなテーマは、キャンパス内に点在する既存の体育施設やサークル棟を集約して学生にとってコミュニケーションの場となるべく利便性を高めること、さらに本学研究者による積雪寒冷地における環境技術の反映と実証を行うためのモデル施設となることであった。佐藤孝教授を中心とした建築家チームは、かつて同じキャンパス内において約30の講義室を集約した新講義棟Gを手がけている。ここではオープンで広がりのあるアトリウム空間を教室群で囲い込む構成が採用された。自然光が降り注ぎ、温熱環境が安定する街路状のアトリウムを内包する構成は、学生にとっての快適な居場所をつくりだし、寒冷地における施設モデルとして広く評価された（2002年度北海道建築奨励賞受賞）。今回計画では、新講義棟Gで試みられたアトリウム空間の手法を発展させ、さらに人々が集まる「広場」の特性を現代的に援用することで寒冷地に相応しい公共空間のあり方が提案された。

具体的には、主たる施設であるメインアリーナを「広場」に見立て、周囲を小さな容積の空間が取り囲むことで賑わいを創出することが意図された。全体の構成は、ひとつの焦点や中心軸をあえてつくり、大仰な印象から逃れることが意図されている。その結果、体育施設でありながら人間的スケールが感じられる心地よさが得られた。学生の日々の生活において予期せぬ風景や出会いが生まれ、あたかも雑踏にいるような気分を感じることができる。このようなアリーナのようなビルディングタイプでは、大規模な架構デザインの美しさや技術的工夫を表現の中心に据えるものが多いが、本計画では「広場」というテーマを用いながら親密な空間を実現できたことが大きな成果であろう。

メインアリーナを諸室で囲いこむ空間構成は、もうひとつのテーマである環境技術の活用という点においても大きく寄与している。寒冷地では通年の安定した温熱環境を確保することが求められるが、アリーナ壁面の大きなコンクリート熱容量と外皮の高断熱性能を併用し、相互の熱特性を活用することによって低負荷で快適な温熱環境を維持している。非暖房時においても安定した温度環境を維持できるため、冬期災害時における避難拠点のモデル施設として位置づけることも可能であろう。そのほかソーラーパネルの壁面利用や地中熱ヒートポンプの効率利用と通年活用など、すでに知られた自然エネルギー活用のシステムをより高度に洗練させて実用性を高める工夫がなされている。

採用された環境技術が表出するファサードデザインにも建築家の個性がよく現われている。コンクリート打ち放しのマッシブな量塊に、直壁の太陽光パネル、日射遮蔽のための庇、奥行き深く穿たれた開口部デザインなどの要素が、多少乱雑さを残したまま配列されている。抽象性や洗練性といったものに対する過度の追求を避け、手の痕跡を残しながら親しみのある風景が作りだされた。

建築家が培ってきた寒冷地におけるアトリウム空間の手法を発展させて普遍的な形式を導いたこと、さらにこれらの形式や手法を個性的なデザインとして昇華させ、キャンパス内に新しいシンボルをつくり出した手腕を高く評価したい。

(文責：加藤誠)

第38回 北海道建築賞

五十嵐 淳 君 「repository」の設計

旭川の中心部からしばらく車で走って市街地を抜けると、あたり一面が広大な田園風景へと変わった。人家も稀にしか視界に入っこないような、平坦な広がりの中に、自らの存在を主張しているような、またはその反対でもあるような淡く白いボリュームが現れてくる。約10×23mを底辺とするそのボリュームは、住宅というには相当に大きなものであるが、端部が丸められているためであろうか、それはあたかも遊牧民の住居の佇まいに似ているようにも見える。ここでは隣地境界や道路境界などという形式的な枠組みを超えて、全方位と等価に向き合おうとしている所以であろうか。

ガレージを兼ねた半円形の半外部空間からエントランスへと至ると、内部には贅沢なまでに大きな空間が広がっている。延床面積は約280㎡にも及ぶが、ある意味で構成はシンプルなワンルーム空間である。例えていえば「日」の文字を描くように、全体の外周壁に沿って、あるいは内部を大きく二分するように、幅約2mのゾーンが設けられている。これらのゾーンは、生活の種々の現実を受け止める水回りや収納、あるいは半外部の中間的なスペースとなっている。つまりこの住宅の主たる空間は、内部/外部と内部/内部のいずれにおいても、このゾーンをクッションとして関係づけられているといえる。中でも内部を中央で二分する水回りの領域の存在は、上部から降り注ぐ光の効果も相まって、単に中間領域的なもので内部を包み込むような空間のあり方とは異なる立体感を創り出している。

さらにこれらの構成的な操作に加えて、空間のあり方をより純粹にかつ美しく見せるために、徹底したフォトジェニックな操作が為されている。各スペースを関係づけるテーパーの付けられた大きな開口部、細い鉄筋で吊られた外周に沿った床、2×4材の梁による均質な架構表現などによって空間は抽象化され、光の移ろいと空間の見え隠れとによって現象的なものとの関係性だけを浮上させようとしている。これらの各々の操作は、いずれも作者が近年試みてきたものであり、この作品においてそれらがひとつのベクトルに向かって結実しているように見える。その意味において、まだ若くして作者はひとつの集大成を創り上げたともいえるだろう。

北海道の建築家にとって、中間的な領域は大きな関心であり、これまでも多くの試みが為されてきた。しかしここでの作者のように、それを建築全体の問題として引き受けて、細部に至るまで全てを徹底して構想しようとすることは稀であったように思われる。表面的あるいは部分的に止まることなく、また“北海道らしい”という既成の枠組みを安易に出立点とするこ

となく、地域環境的なものを含め様々な条件を自ら咀嚼して、建築全体を大胆かつ繊細に構想していくこと。重要なのは、北海道の問題を必然として受け止めながらも、そのような閉域を超えたところにまで建築表現の可能性を開いていくことなのだろう。逆説的ではあるが、地域的な問題に深く徹底して取り組むほど、外部へと広く共鳴していくものなのかもしれない。北海道の建築家でありながらも、“北海道の”という枕詞なしにも広く語られ得ること。これこそが、作者が北海道にもたらした最も大きな功績であるようにも思われる。

(文責：山田深)

第38回 北海道建築奨励賞

石塚 和彦 君 「SPROUT」の設計

琴似発寒川沿いの住宅街に建つこの作品は、その変形したプロポーションと赤い板金外装により、造形に走った、少々気をてらった作品ではないかという第一印象を与える。

敷地 22 坪、延床面積 119 m²。

「狭さ」への取り組みは、現地審査を行って納得させられた。

敷地形状に合わせた 1 階平面形状、その隅切った部分に玄関が配置されている。

内部はディテールまでしっかりとデザインされた階段を中心として、レベル差を持ってつながる分節された空間で構成されている。一つ一つの要素は決して十分な広さを持たないが、周辺との隔たりを作ることで、狭いことの「落ち着き」「心地よさ」を作り出している。居間やDK、浴室は大きな開口で外部とのつながりを持ち、その狭さを感じさせない。

「狭さ」はその空間と周辺とのつながりで印象に変化をもたらし、多様な展開を導き出している。

作者は、密度の濃いデザインで、ここにたくさんの仕掛けを詰め込み、そしてその精度が高い。特に光の取り扱いが上手く、開口の絞り込みや開放による操作で内部の光が充実している。

階段室・廊下を活かした、光井戸や自然換気の工夫、床下暖房なども大袈裟でなく機能を形にして心地よくまとめている。

車好きの施主ならではのガレージの仕掛けや、玄関わきに設えられた訪問者のための小上がりなどは、遊び心と施主との信頼関係によりもたらされたもので、このプロジェクトが成功していることを物語る。

住宅は、少々抑圧された狭隘な空間であるからこそ、そこに不均質な光や外部との関係性において多様な「居場所」が形成される。

まさに、ここで展開されたのは、「狭いが故の豊かな居場所づくり」であったと確信した。

(文責：久保田克己)

